

信じて委ねる

【聖書】サムエル記上24章1～23節

ダビデはそこから上って行って、エン・ゲディの要害にとどまった。ペリシテ人を追い払って帰還したサウルに、「ダビデはエン・ゲディの荒れ野にいる」と伝える者があった。サウルはイスラエルの全軍からえりすぐった三千の兵を率い、ダビデとその兵を追って「山羊の岩」の付近に向かった。途中、羊の囲い場の辺りにさしかかると、そこに洞窟があったので、サウルは用を足すために入ったが、その奥にはダビデとその兵たちが座っていた。ダビデの兵は言った。「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです。」ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取った。しかしダビデは、サウルの上着の端を切ったことを後悔し、兵に言った。「わたしの主君であり、主が油を注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油を注がれた方なのだ。」

ダビデはこう言って兵を説得し、サウルを襲うことを許さなかった。サウルは洞窟を出て先に進んだ。ダビデも続いて洞窟を出ると、サウルの後方から声をかけた。「わが主君、王よ。」サウルが振り返ると、ダビデは顔を地に伏せ、礼をして、サウルに言った。「ダビデがあなたに危害を加えようとしている、などといううわさになぜ耳を貸されるのですか。今日、主が洞窟であなたをわたしの手に渡されたのを、あなた御自身の目で御覧になりました。そのとき、あなたを殺せと言う者もいましたが、あなたをかばって、『わたしの主人に手をかけることはしない。主が油を注がれた方だ』と言い聞かせました。わが父よ、よく御覧ください。あなたの上着の端がわたしの手にあります。わたしは上着の端を切り取りながらも、あなたを殺すことはしませんでした。御覧ください。わたしの手には悪事も反逆もありません。あなたに対して罪を犯しませんでした。それにもかかわらず、あなたはわたしの命を奪おうと追い回されるのです。主があなたとわたしの間を裁き、わたしのために主があなたに報復されますように。わたしは手を下しはしません。古いことわざに、『悪は悪人から出る』と言います。わたしは手を下しませんが。イスラエルの王は、誰を追って出て来られたのでしょうか。あなたは誰を追跡されるのですか。死んだ犬、一匹の蚤ではありませんか。主が裁き手となって、わたしとあなたの間を裁き、わたしの訴えを弁護し、あなたの手からわたしを救ってくださいますように。」

ダビデがサウルに対するこれらの言葉を言い終えると、サウルは言った。「わが子ダビデよ、これはお前の声か。」サウルは声をあげて泣き、ダビデに言った。「お前はわたしより正しい。お前はわたしに善意をもって対し、わたしはお前に悪意をもって対した。お前はわたしに善意を尽くしていたことを今日示してくれた。主がわたしをお前の手に引き渡されたのに、お前はわたしを殺さなかった。自分の敵に出会い、その敵を無事に去らせる者があろうか。今日のお前のふるまいに対して、主がお前に恵みをもって報いてくださるだろう。今わたしは悟った。お前は必ず王となり、イスラエル王国はお前の手によって確立される。主によってわたしに誓ってくれ。わたしの後に来るわたしの子孫を断つことなく、わたしの名を父の家から消し去ることはない、と。」ダビデはサウルに誓った。サウルは自分の館に帰って行き、ダビデとその兵は要害に上って行った。

【序】記念日の6月23日

6月23日の沖縄慰霊の日追悼式に先立ち、沖縄では元アメリカ海兵隊の軍属が若い女性を殺害した事件が発生しました。これに抗議する**65000人の県民大会**が行われ、海兵隊撤退が叫ばれました。すると新聞の朝刊に**55才の主婦の投書**がのりました。お読みになった方も多いでしょう。

「**「海兵隊は撤退を**」のボードの波は胸に迫りました。女子学生が「日本本土にお住まいの皆さん。今回の事件の**第二の加害者**は誰ですか。**あなたたち**です。しっかり沖縄に向き合っていただけませんか」と呼びかけていました。**その通り**という思いでいっぱいになりました。

恥ずかしながら、沖縄戦のことを詳しく知らずに生きてきました。自分のふだんの平和な生活を当たり前のように享受していました。でもこれは沖縄に基地を押しつけている上での生活です。沖縄を泣かせて軽視し、いじめのような構図でできあがった本土の平和な生活です。沖縄の怒りを、もっと真剣に受けとめなくてはと思います。同じ日本人、つらさは平等に受けるべきです。

6月23日の沖縄慰霊の日。沖縄のために静かに祈りつつ、自分もつらさ、悲しさを受けとめる覚悟を持ちたいと思います。沖縄の青い海は悲しい青ではなく、希望の青であるようにと心から願います」

本土復帰から昨年末までの間に、小さな沖縄で米軍兵士による犯罪事件が5896件も発生しているそうです。でもその多くは地位協定によって保護されているのです。沖縄の怒りは当然ではないでしょうか。

また6月23日は、私たち川越教会にとっては、教会組織感謝礼拝を行った記念日でした。浦和教会から川越の開拓伝道に派遣された小久保富成牧師夫妻が高柳千代姉、後藤陽子姉と4人で第一回の礼拝を守ったのが1968年5月5日(日)。二代目の小河義伸牧師時代の1985年6月23日(日)に、母教会の総会の承認を得て、日本バプテスト川越キリスト教会としての感謝礼拝を守りました。教会員33名、礼拝出席平均24名の群れ。17年の年月がかかりました。週報の巻頭言の紙面に、簡単な年表を記しておきましたので、ご参照ください。

伝道開始から48年、教会組織してから31年経ちました。ユックリペースの成長ですね。私を含めて高齢者の多い群れです。そして私も後1年余で引退します。良い後任者が与えられるように心を合わせて祈りつつ、私たちなりに、ベストを尽くして参りましょう。礼拝・昼食後に牧師招聘委員会主催の学びの会に、皆さんご出席下さるようお願いいたします。

[1]ダビデを妬み続けたサウル

では、聖書の学びに入りましょう。先週はイスラエル王国の初代の国王になったサウルがどのような人物であったかを、学びました。今日はそのサウルに妬まれて、逃げ廻りながら生き延びていった、二代目ダビデ王の人柄の特徴を学ぶことにします。

当時のイスラエルはペリシテに支配されていて、鍛冶屋を持つことも禁じられていました。槍や刀を造らせないためでした。民衆の強い願いによって宗教指導者サムエルから初代の王に選ばれたサウルは「自分は最も小さい部族の中の最小の一族のものなのに」と王選びの集会の時には、物置の荷物の陰に隠れていましたが、サムエルによって王に任命されるや、人々の期待に応える目覚ましい働きをしました。

「サウルは周りのすべての敵と闘わなければならなかったが、向かうところどこでも勝利を収めた」(サムエル上14:47)。武将として非常に優れた資質を備えていたのです。ところが家来の一人に召

した羊飼いのダビデが、これまた目覚ましい活躍を始め、民衆の人気を博するようになると、王位を脅かされることを恐れて、彼を殺そうと追い回すようになりました。

ダビデは国中を逃げ廻り、最後には敵側ペリシテのガドの王の許に身を寄せることによって、やっと身の安全を保ちます。そしてサウル親子がペリシテとの決戦で戦死を遂げてから、ユダに戻って、ヘブロンで王位に着いたのです。もしもサウルが、「自分は民の中で最も小さな一族の者だった」という自覚を持ち続けていたら、ダビデの目覚ましい働きを見ても、神がダビデを選び、ダビデによって神がお働きになっていると受け取って、喜び感謝することが出来たでしょう。そうしたら悪霊に悩まされて精神錯乱に陥ることもなく、またペリシテとの決戦で親子もろともに死ぬこともなく、ダビデを十分に活躍させながら、王位を全うできたことでしょう。残念なことです。

[2]羊飼いの生活で養われた人柄

さてダビデです。彼は8人兄弟の末っ子。サムエルがサウルに代わる次の王を探して、油を注ぐためにエッサイの家を訪れた時、サムエルを囲む会食に呼ばれた7人の兄たちには、神のOKが出ませんでした。「あなたの息子はこれだけですか」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」。そして呼び出されたダビデに、神の示しが下ったのです。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ」。この日以来、主の霊がダビデに激しく降るようになりました(16:13)。

イスラエルの中で最小部族の最小氏族の者と卑下していたサウルと、家族の中で一番小さな者として無視されていたダビデ——サムエルによって示される神の選びには、小さな者に目を注いでお用いになる共通点がありますね。

さてダビデの出世の糸口には、異なる資料が二つ記されています。一つは彼の音楽の才能です。羊飼いでしたが豎琴を巧みに演奏し、言葉に分別があり、外見も良い若者でしたので、サウル王が悪霊に悩まされて錯乱状態になった時に、慰め静めてもらおうとして、家来たちが王宮に召したのです。そしてサウルに大変気に入られました(16:14～23)。いわゆる音楽療法者ですね。

もう一つは、ペリシテ軍の豪傑ゴリアトを小石一発で打ち倒した武勇です。ゴリアトは身長3mの巨人で鎧兜に身を包み、大きな槍を振り回す大勇士です。しかしダビデは羊飼いの姿のままで彼に立向かい、石投げ器の小石一発で額を打ち刺し、倒してしまいました。今でいえば槍とピストルとの勝負。ピストルの方が有利ではないでしょうか。でも大きな兜をかぶる相手の額に一発で命中させるには、余程心を冷静に保たなければなりません。スポーツにしても、最後の決め手は、心の持ち方、精神力です。そこがダビデの優れていた点でした。

イスラエルの兵士たちはゴリアトの風貌にちじみ上り、誰ひとり立向かう者がいませんでした。では兵士になる年齢にも達していない若い羊飼いのダビデには、どうしてゴリアトと対決する勇気があったのでしょうか。彼は単純でした。自分には羊を襲う獅子や熊と対決して、杖と石投げ器で追い払ってきたという経験ある。「獅子の手、熊の手からわたしを守ってくださった主は、あのペリシテ人

の手からも、わたしを守ってくださるにちがひありません」(17:37)と主の守りを単純に信じ切っていました。ですから普段と同じ羊飼いの服装のまま、野原での野獣との決闘と同じ様に、ゴリアトに対しても、石投げ器で一発を的確に打ち込むことが出来たのでした。普段の日常生活で養われた主なる神へのこの**単純な信頼・信仰**を持つことの大事さを学ばされますね。

[3]主が油を注がれた方

ダビデは逃げ廻っていた時に、サウルを殺せる**絶好の機会**を二度与えられましたが、その**第一回目**が今日の聖書です。サウルは「ダビデはエン・ゲディの荒れ野にいる」との情報を得ると、えりすぐった3000の兵を率い、ダビデとその兵を追って「山羊の岩」の付近に向かいました。ところが途中で彼は**大便**をしたくなり、洞窟の一つに入り、しゃがんで用を足し始めました。

ところがその**洞窟の奥**には、ダビデとその兵たちがひそんでいたのです。ダビデの兵たちは言いました。「主が『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思いどおりにするがよい』と約束されたのは、この時のことです」。ダビデは立って行き、サウルの上着の端をひそかに切り取りました。しかし彼はサウルの上着の端を切ったことを**後悔**します。そして部下たちに言いました。「わたしの**主君**であり、**主が油を注がれた方**に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されぬ。彼は主が油を注がれた方なのだ」。

サウルは気が付かぬまま、用をすますと洞窟を出て行きました。ダビデも続いて洞窟を出てサウルの背後から声をかけました。「わが**主君、王よ**」。サウルが振り返ると、ダビデは顔を地に伏せ、礼をして言いました。「ダビデがあなたに危害を加えようとしている、などという**うわさ**になぜ耳を貸されるのですか。今日主は、洞窟であなたをわたしの手に渡されました。あなたを殺せと言う者もいましたが、私は『わたしの主人に手をかけることはしない。**主が油を注がれた方だ**』と言い聞かせました。わが父よ、よく御覧ください。あなたの上着の端がわたしの手にあります。わたしは上着の端を切り取りながらも、あなたを殺すことはしませんでした。御覧ください。わたしの手には**悪事も反逆もありません**。それにもかかわらず、わたしの命を奪おうと追い回されるのです」。

ダビデの訴えを聞いて、サウルは**声をあげて泣き**、ダビデに答ました。「お前はわたしより正しい。お前はわたしに**善意**をもって対し、わたしはお前に**悪意**をもって対した。」「主がわたしをお前の手に引き渡されたのに、お前はわたしを殺さなかった。自分の敵に出会い、その敵を無事に去らせる者があろうか。今日のお前のふるまいに対して主がお前に恵みをもって報いてくださるだろう。**お前は必ず王となり**、イスラエル王国はお前の手によって確立される。主によってわたしに誓ってくれ。わたしの後に来るわたしの子孫を断つことなく、わたしの名を父の家から消し去ることはない、と」。ダビデはサウルに誓いました。そしてサウルは自分の館に帰って行き、ダビデは要害に上って行きました。

第二回目は26章に記されています。この時もサウルは精鋭3000人を率いて南のジフの荒れ野にとどまるダビデに迫りました。ダビデは夜中に従者を一人連れて、野営しているサウルの陣営にし

のび込みました。サウルの幕屋では指揮官アブネルたちが王を囲んで寝込んでいます。従者アビシャイは、「**槍の一突きでサウルを殺します**」と言いましたが、ダビデは「殺してはならない。主が油を注がれた方に手をかければ、罰を受けずには済まない」と言い、枕もとの**槍と水差し**を取って、立ち去りました(26:9～11)。

そして遠く離れた山の頂に立ち、**指揮官アブネル**に呼びかけました。「お前たちは**死に値する**。主が油を注がれた方、お前たちの**主人を守れなかった**からだ。さあ、枕もとの槍と水差しがどこにあるか見て見よ」(26:16)。ダビデの声に気付いたサウルに、ダビデは言いました。「今日、主はわたしの手にあなたを渡されましたが、**主が油を注がれた方**に手をかけることを、わたしは望みませんでした。今日、わたしがあなたの命を大切にしように、**主もわたしの命を大切にされ**、あらゆる苦難からわたしを救ってくださいますように」(26:23～24)。

サウルは「**わが子ダビデ**よ。お前に祝福があるように。お前は活躍し、また**必ず成功する**」と言い、引き上げていきました。ダビデはここに至って、「このままではいつか必ずサウルの手にかかるに違いない」と心を決め、ペリシテの地に逃れて、時を待つことにしたのでした(27:1)。

[結]御心をなしたまえ

ここに、才能豊かな武将でありながら、ダビデに対しては**感情に激して**右に左にと大きく揺れるサウルと、そのサウルを決して殺そうとはせず、逃げ廻ったダビデとの**人格の違い**が明らかに記されています。サウルはダビデに殺されずに命を守られたと分かった時に、泣いて叫びました。「**お前は必ず王となり**、イスラエル王国はお前の手によって確立される。主によってわたしに誓ってくれ。わたしの後に来るわたしの子孫を断つことなく、わたしの名を父の家から消し去ることはない、と」。

サウルはこのように自覚しているのに、どうして**ダビデ**を連れて一緒に自分の館に帰ろうとはしなかったのでしょうか。王位に対する執着がそれほど強かったからでしょう。他の何者にも、特にダビデには、どうしても王位はゆずれなかった。だからダビデを連れて、一緒に帰れなかったのです。

しかしサウルは、この点を除くと**良い王**だったようです。彼と長男ヨナタンとが戦死すると、ヘブロンユダ族だけがダビデを王にしましたが、イスラエルの民は大部族を始め 11 部族とも、サウルの4男イシュボシエトを王に立てています。そしてダビデが**全イスラエルの王**になるのは、それから7年半後です(サムエル下 2:11)。サウルは最小の部族の出身でありながら、ダビデ以外の他の部族とは、折合いが良かった。王として皆を良くまとめていたことを現しています。矢張り彼は**有能な王**だったのです。

一方ダビデは、サウルに妬まれて、国中を逃げ廻り、遂にペリシテのガドの王アキシユの家来になって、やっと生き延びることができました。敵として戦ったペリシテの人々の中で生きていくのですから、ずいぶん**気苦労**も多かったことでしょう。それならいっそのこと、サウルを殺していた方が、どれほど**楽な人生**を送れるか分かりません。しかしその**打算**をダビデは決してしなかったのです。

何故か？それは**神がサウルを王として油を注がれた**からです。ダビデにとっては**神の選び・神の御心が絶対**だったのです。自分の願いや都合は二の次にして、**先ず神の御心に聞き従う**——この信仰をダビデは**心の芯**にしていたのです。では自分の人生はどうなるのか——それも神の御心によるのです。**神の決定に委ねて従う**のみなのです。

その結果、ダビデがヘブロンでユダの王になったのは 30 才。サウルのもとで 10 年以上も辛い日々を送らねばなりません。そして 7 年半後にやっと全イスラエルの王となり、70 才まで働きました。家族の中で一番小さな者として**無視**されていた**羊飼いの少年の波乱に富んだ人生**——本人自身も予想だにできなかった人生だったことでしょう。しかしそれが、**神が御心によって彼に与えられた人生**だったのです。そして彼はその人生を生き抜いたのです。

私たちは日々**主に祈り**を祈ります。「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」。私の今日という一日にも、神が私に**御心を聞かせて、従わせて**下さるように。御心を行って下さいと祈りましょう。私が**自分の将来**の設計を立てるに当たっても、**御心を第一**にして聞きとって進むように祈りましょう。主イエスを十字架につけてまでして、私を救おうとして下さっている神の愛を信じて、聞き従いつつ、**人生を主に委ねて**生きていきましょう。

祈ります：主よ、沖縄に平和が確立しますように、私たちをお導き下さい。私たちの川越教会に新しい歩みをお与え下さい。また今日は「主に油を注がれた方だ」という一点で、サウルの命を守ったダビデの信仰を学びました。私たちにも神の**選び・神の御心**を第一とする信仰をお与え下さい。私を御心に聞き従わせてください。ダビデ自身、油を注がれながら、長い苦勞の年月を耐え忍んで、御心の成る日を待ちました。この私も、人生をあなたの御手にお委ねできますようにお導き下さい。主イエス・キリストの御名によっていのります。

アーメン